

本町橋は、大阪で現役最古の橋であると同時に、全国的にも現役最古の鋼アーチ橋である。

本町橋の歴史は豊臣時代にさかのぼる。東横堀の開削と同時に架けられたと考えられ、大阪夏の陣でも両軍の攻防戦の舞台となった。大阪城に政治の中枢があった時代には、東横堀は、船場の商人町と一線を画する水路で、そこにかかる橋は戦略上も非常に重要であったため、大阪では数少ない公儀橋として、幕府が直接管理する橋の一つであった。

本町通は、大阪の市街地改造の大きな要素となった市電の敷設にともなって、現在見るような広い道になった。大阪で初めて市電が通ったのは明治36年（1903）のことで、その後、道路拡張を行ないながら、明治末期から昭和初期までの間に市電網が整えられていった。本町通は、東は谷町筋から西は木津川を越えるところまで、約3 kmが大正2年（1913）に開通している。これと同時に本町橋も完成した。同じ年に完成した同じ形式の東京の四谷見附橋や名古屋の納屋橋は既に架け替えられ、本町橋は大正期の橋梁技術を伝える貴重な橋となっている。

市電事業によって近代化された橋は、実用本位のものが多く、デザイン上の配慮も少なかったが、本町橋には特別の配慮が払われていた。上部工の2ヒンジアーチを支える中央の橋脚は幅が広く、側面にギリシャ建築を想定させる石柱の飾りを持ち、全体としてルネッサンス風のデザインになっている。このデザインは本町通の西端に架けられた木津川橋と同じデザインパターンで、当時の重要路線を飾るにふさわしいデザインである。

この意匠は木津川橋に隣接してあった旧府庁の表玄関を飾っていたギリシャ神殿風のデザインからヒントを得たものと考えられる。この例は同一路線に当たる橋のデザインを統一させるというテーマを実現したのものとして注目される。そして、橋の西詰には行政機関として重要な東区役所（当時）が、東詰には見本市会場のような施設があり、市内でも重要な土地柄であったため、特に橋のデザインにも配慮がなされたものと思われる。

本町橋は架設以来80年にもなる。この間、市電をはじめとする重交通によく耐えてきたが、車輛を直接支えるコンクリート床版の傷みや、鋼の床組の腐食が進んだため、昭和60年頃に大規模な補修の手が加えられた。この時、昔日のおもかげを失っていた橋面の装いも新たになった。高欄、歩道舗装、照明が新しいデザインになり、橋詰の広場の修景や橋の由来碑も整えられている。ただ、本町橋の上空に高速道路が建設されたため、橋の眺めも、川面の眺めも制約されてしまったのは残念な気がする。 [MH]

竣工年月：大正2年（1913）5月

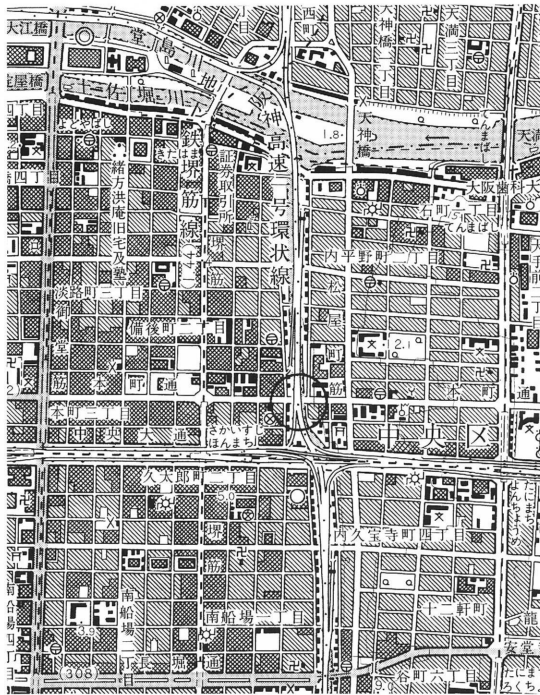
所在地：大阪市中央区

河川名：東横堀川

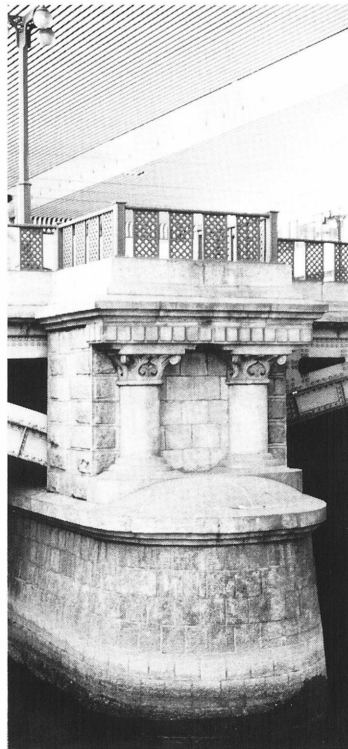
橋長・幅員：46.5×21.56m（車道15.0m＋歩道2×3.28m）

径間数・支間長：3×14.02m

形式：上路2ヒンジアーチ



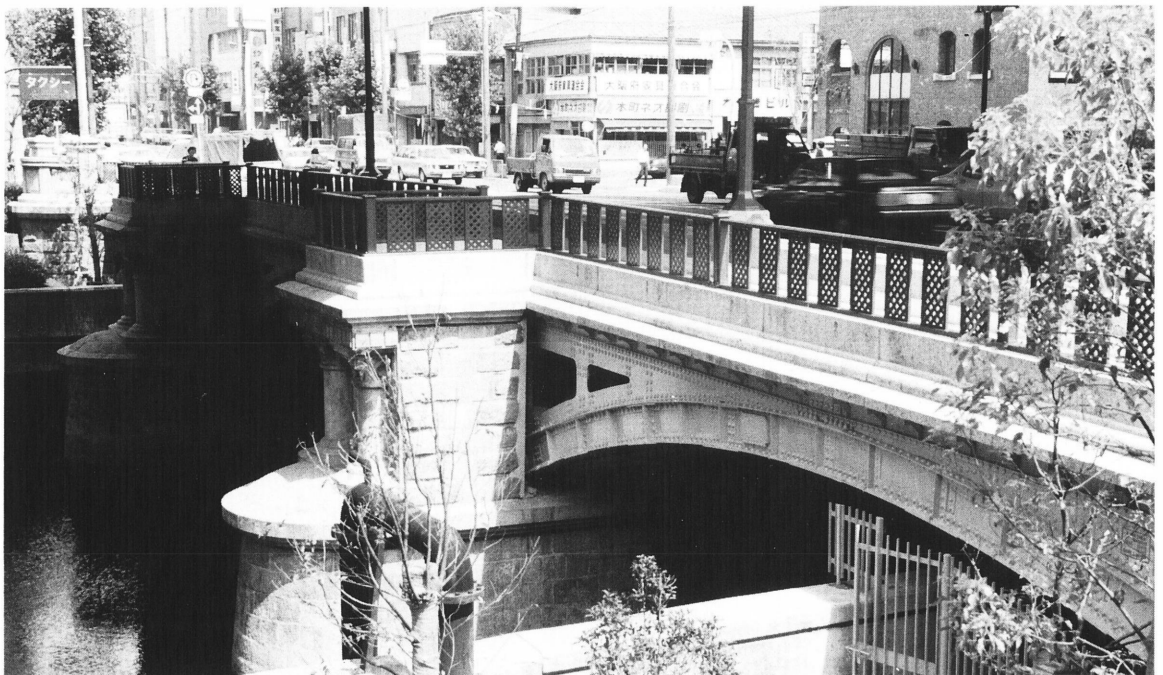
(1:25,000 大阪東北部)



橋脚。ルネッサンス風のデザインが特徴。



親柱。大正二年五月架設と刻まれている。



〈1982年8月，撮影・いづれも松村 博〉